

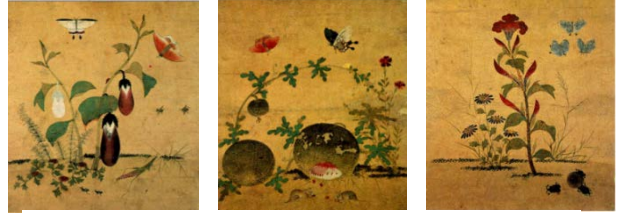
「茄子双鳥図」(福岡市美術館所蔵)の現状模写及び装溝

博士前期課程 日本画領域 姜 貞任

《原本について》

申師 任堂 シンサイインダン 絹本着彩 縦 89.4×横 48.2 cm 朝鮮時代初期(16世紀前半) 福岡市美術館蔵

「茄子双鳥図」は韓国の夏の植物と昆虫などが掛幅の形式で構成した草虫図である。朝鮮王朝時代16世紀に申師任堂によって描かれた。構成要素にはそれぞれ意味があり、この作品は「子孫を草が広がっていくようにたくさん産んで登科(科挙に合格すること)し、発展して高い地位になってほしい」といった意味がある。作者の申師任堂(1504～1551)は本名は申仁善で、「申師任堂」は号である。「東方の聖人」と称される朝鮮性理学の巨儒、李栗谷(イ ユルゴク)(1536～1584)の母親でもあり、現在でも理想の母親像として広く親しまれている。山水・葡萄・墨竹・墨梅など幅広い画技をもっていたとされる女流画家で、特に色彩豊かで温雅な草虫図が名高い。



申師任堂作例「草虫図八幅屏風」の一部

《朝鮮初期の花鳥画について》

朝鮮初期の花鳥画は、様々な素材で韓国独特の伝統的な絵画思想の基礎を確立させた。花鳥は構成要素にそれぞれ意味があり、装飾性と象徴性が強く、先史時代から花鳥画が描かれた。高麗時代に入って独立した絵画になり、呪術的、実用的な性格から、純粹芸術的な鑑賞用に発展する。朝鮮初期の花鳥画の画風を見ると、大きく二つの性格に分かれる。一つは高麗時代の花鳥画の継承と宋、元の花鳥画の影響を受けた宋元画風の花鳥画である。二つ目は朝鮮初期の文化を主導した士大夫(門閥の高い人)の画風で、明とも絵画交流をし、朝鮮初期の絵画に大きく影響を与えた花鳥画である。申師任堂は二つの画風を受容しながら、独自の図柄を作った。

《模写の工程》

- 1. 熟覧** 原寸大カラー写真を参考にし、色見本を作る。熟覧の時に色見本と原本の色を比較しながらパステルで直し、鉛筆でメモを取る。
- 2. 下図** ロール石州紙にドーサ(滲み止め)をし、原寸大カラー写真の上に置く。紙を上げ下げしながら残像をとらえ、墨線にて線と剥落をとる。
- 3. 基底材の準備** 原本の絹に近づけるため、絹目が粗い手織り風機械織り絹を使用し、矢車染料で染色を行う。6時間砧打ちをして画面を平滑にし、滲み止めとして、ドーサを表裏1回ずつ引き、木枠に絹を張り込む。
- 4. 線描き** パネルに張り込んだ上げ写しを木枠に張り込んだ絹の下に置き、写し込み、線描きする。本図の墨線は強くない濃淡のある茄子の葉の長い線と細短い菊の葉の線があり、墨線が重要な作品である。抑揚に気をつけながら線描きを行う。
- 5. 彩色** 色見本と比較しながら手板に実験し、彩色を行う。
- 6. 仕上げ** 色の数が少ないため、バランス良く入っているかを離れて見て確かめる。鳥の黒色と比べると白色が弱かったため、胡粉を表から少し描いてバランスを合わせる。
- 7. 装溝** 完成した作品に表装を行う。今後の扱いや展示上の環境を考慮して、本制作では和額装にした。



染色



線描き



色見本

《まとめ》

申師任堂の鳥虫図には自然の弱肉強食の場がよく描かれている。この「茄子双鳥図」にも枯れている葉やバッタを怖い目で見ている鳥など、時間の流れや弱肉強食の自然な流れが描かれている。「茄子双鳥図」の現状模写ではその流れを意識しながら、墨線と緑青が単純にならないように重点を置いた。申師任堂の作品は長い線は柔らかく、短い線は細く描きおろし、鮮やかな色で単純に塗っても表情が見える特徴があり、それらの表現を学んだことは貴重な体験となった。